

2 2 2

そんな個性的な6期生の子どもたちでしたが、素直さにあふれた彼らには決定的に欠けているものがありました。

素直にはやる。言うことは聞く。でも指示を大きく突き抜けて来たり、ギラギラした覇気のあるリーダーが出てこなかったのです。TOPの生徒たちはどの学年もとても仲良くなります。

長く同じ釜の飯を食った仲間、ずっと切実な日々を共にした戦友。one teamである彼らの絆に対してはどんな形容も大仰なものではありません。

でも同時に、勝負は恐ろしく孤独なものです。誰かともたれ合って、隣を気にし合って、仲よしこよしでみんなで受かれるといった甘い世界ではないのです。

4期生も5期生も、またこの6期生も、そういった鬼気迫るほどの勝ち気はありませんでした。

思い出すのは2016年に受験した2期生のSくんです。

Sくんはあらゆる意味で異色の存在で、際立った思考力を持った彼は

押しも押されもせぬクラスのエースでした。理系では一切他の追随を許さず、TOP 入会以前苦手だった国語も、私をとことん追いかけて得点源へと磨いていきました。Sくんはとにかく型にはまるのが嫌い
で、学校や親御さんも彼にはかなり手を焼いていましたが、私たちの言うことは徹底的に守りました。唯我独尊のようなキャラクターを持ちながらも、ボクは先生に恵まれた、それだけは自信を持って言える
といつも口にしていました。

そんなSくんの最大の強みが人一倍の勝ち気さ、負けん気の強さでした。

ポイント制の早押し形式にした授業で2位になり、涙を浮かべながら

「ボクは1回当てられた回数が少なかった。」と譲りませんでした。みんなはまあまあ…と苦笑していましたが、Sくんはバリバリの本気で
した。

また、私たちの教え子である御三家の先輩たちが激励に来てくれた時

も、みんなが感謝と憧憬の言葉を口にする中、「先輩たちはすごかった。でもボクも負けません。ボクだって負けたくない。」とハッキリ口
にしていました。

Sくんのこの尋常でない程の負けん気の強さと勝負へのこだわりは、

彼の成長を大きく加速させ、TOP 第 1 号の新御三家中(駒場東邦中)合格者へと押し上げました。

そうやって、私たちの勝負への並々ならぬ執念を肌で感じながら、TOP の子どもたちは本当の戦う集団へと成長していきます。

(次回につづく)

2020 年 1 0 月 2 5 日

大井 雄之